

平成30年6月27日

独立行政法人 大学入試センター

理事長 山本廣基 様

東京大学高大接続研究開発センター長

元・高大接続システム改革会議委員

南風原朝和

平成30年6月18日発表「大学入学共通テスト」における問題作成の
方向性等と本年11月に実施する試行調査（プレテスト）の趣旨について」
についての公開質問への回答をふまえた意見

このたびは、私どもの質問（平成30年6月19日付）に対し、平成30年6月26日付
けでご回答いただき、誠にありがとうございました。ご多忙のところ、迅速にご対応いた
だき、感謝申し上げます。いただいたご回答をふまえて、大学入学共通テストについての意見
を2点、お伝えしたいと存じます。今後の検討において参考にしたいけると幸いです。ど
うぞよろしく申し上げます。

【意見1】国語の記述式問題の合計点を、少数の段階に区切って段階別表示にするのは、記
述式問題の出来不出来の個人差を識別するための情報が減少するだけで、入学者選抜に役
立つことは何もないので、行うべきでない。

（説明）国語の記述式問題の採点に関する質問1-4で、「もしも、小問ごとにたとえば1
点～4点と数値化し、80～120字程度を記述する小問についてはその1.5倍の1.5
点～6点と数値化して合計し、その合計点を5つの段階に区切ったものでしたら」という前
提を置きましたが、ご回答ではその前提が否定されておりませんので、その前提で、この意
見を申し上げました。4点満点が2問、6点満点が1問で、合計が14点満点になりますが、
これをたとえば3.5点～5.5点はまとめて段階1とし、6点～7.5点はまとめて段階
2、・・・とするのは、個人差情報を無駄に捨てるだけで意味がない、という意見です。

記述式問題と選択式問題が混在するテストは多くありますが、通常は、適当な重みを付け
て合計しています。今回提案されているように、記述式問題だけ、しかもいったん合計点を
算出した後に、段階別表示にするというのは一般的ではありません。ご回答では、「総合評
価については、大学側の選抜に活用しやすいよう5段階とする方向」とありますが、どのよ
うに活用しやすいのか不明です。たとえば、国立大学協会が平成30年3月30日に発表した
「大学入学共通テストの枠組みにおける英語認定試験及び記述式問題の活用に関するガ

イドライン」では、「国語の記述式の段階別成績表示については、その結果を点数化しマークシート式の得点に加点して活用することを基本とする」とあります。このガイドライン自体の適否は別として、初めに合計点があり、最後も点数化されるものを、その途中の段階で少数の粗い段階に区切るというのは、失うものばかりで得られるものはありません。

なお、ご回答の中に項目反応理論への言及がありますが、ここで述べた意見はそうした特定の理論に依拠するものではなく、ごく常識的な判断だと思います。また、試行調査の結果を分析しないと判断できないという性質のものでもありませんので、早めに見直されるのが良いと思います。

【意見2】大学入学共通テストの英語試験として、センターが作成する英語試験のみを課す大学がありうるのに、その中の筆記試験から従来の発音、アクセント、語句整序などの問題を除いて出題内容を狭めることは、英語の能力を総合的に評価するうえで望ましくないため、行うべきでない。

(説明) ご回答からは、センターが作成する英語試験のみを課す大学に対して、出題内容を狭める理由がまったく分かりません。これから引き続き検討されるとのことですが、これも意見1と同様、ロジックの問題であり、試行調査の結果を分析しないと判断できないという性質のものではありませんので、早めに見直されるのが良いと思います。

以上